

「子どものころ」の見方、育て方 ー理解し、育み、守るためにー

推薦のことば 子どもを育てる、みんなで育てる

日本学術会議会長 黒川 清

生まれる前から子どもは何かを感じている。お母さんのお腹の中で何かを感じている。外の世界で起きていることを感じている。未知の世界への不安か、期待か、本能的に何かを感じ取っている。

生命科学の進歩で脳機能の理解は格段に進んだとはいえ、社会の変化はもっと急速だ。これは20世紀の後半の30～40年で特に急速に変化した。今の社会のありようは長い間に人類が築き上げた文化や常識とは、はるかに離れたところにある。各世代の大人の「常識」は若い世代の常識とはかなり離れている。しかし人間の基本的感情や感覚はそんなに変わるはずがない。親子の情や優しさ等、また自然に接したり、自然の中にいると「ほっと」するのは人間の動物としての本能的なものだ。

いまや、先進国では80%、途上国では40～50%が都市に住む、自然とかなり離れた人工的な環境での日常生活。途上国の大都市にはスラム部分も多い。人工的な環境に囲まれて日常を過ごしている。はだして土の上を歩いたことのないまま大人になる人たちも増えているのではないか。小さいときから感覚的に一番強い刺激を受ける視覚を通して、テレビ等から強制的に、恒常的に脳に刺激が入る。子どもにとってこれは一種の洗脳だ、しかも人工的で、双方向的な対話もない、一方的である。

人間は動物だから自然に対応しながら学び取り、学習から知識をえて、知恵を継承し、文化を形成し、ここまで来た。都会化では核家族だから、世代を超えた知恵が伝わらない。若い母親も父親も赤ん坊に実際に触ったことがない人が多く、自分の子どもが生まれて触るのが、はじめての赤ん坊という人も多いのではないか。親も不安に決まっている。しかも、都会では人間のコミュニティがない。

少子化では、日常的に世代を超えた複数の大人に接する機会が減っている。都会では、両親だけしか知らないで育つ。一人っ子では両親しか知らないで育つ。きょうだいもせいぜい二人では、子ども同士では「you and I」しかない。三人きょうだいで初めて「you and I」「you and us」の場合にでくわす、小さな社会ができる、成長しながら人としての基本的

社会を学ぶ。

脳の機能と「ころ」は違う。子どもはまわりの大人たちと関わりながら育つ。子どものしつけや教育は子どもが生まれる20年前から始まるという。つまり親のことである。その親といえば本人が生まれる20年前のしつけや教育を受けている。つまりは「子どもは社会を映す鏡」なのである。しかし、急速に変化する社会に大人でさえ戸惑い、なかなか追いついていけない。大人は自分の経験から子どものことや子どものころを考えてしまいがちだ。

孤独な、孤立した核家族からなる地域社会は、子どもの感性にはよいとはいえないだろう。地域社会で何かできないか？地域ごとに「子どもを育てる、みんなで育てる」社会活動が大事なのではないか？地域の大学や学校が中心になって、生徒も、学生も、院生も、教員も一人ひとりが住んでいる町の子どものたちの「お兄さん、お姉さん、おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさん」になって日常的に関わっていくべきであろう。人間は社会的動物だ。一人ではみんなさびしいのだ。さびしい大人の社会では、子どものころもさびしい。そのような社会の中であたたかい、やさしいころが育まれるだろう

か。学校は地域社会の中心的社交の場なのだ。子どもを育てるのは親だけではむずかしい。一人ひとりが自分の住んでいる、働いている地域で協力し、育てていこう。子どもを育てるのは本当にむずかしい。

この企画は日本学術会議の中心的課題のひとつである「子どものこころ特別委員会」の成果の一つであり、多くの方たちの熱い思いを感じていただけたと思う。特にこの成果を多くの方たちと共有したいという皆さんの強い願いがこもっている。この企画の中心的役割を担って頂いた田中敏隆先生が急逝され、この叢書を一緒に喜べないのが淋しい。

参考文献

- ・日本の科学技術政策の要諦。日本学術会議
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-19-s1024.pdf> 平成17年4月
- ・黒川 清 「科学者の社会責任：子どもを育てる、みんなで育てる―日本学術会議主催公開講演会 科学・技術への理解と共感を醸成するために」『学術の動向』2004年8月号、54-59

「子どものこころ」の見方、育て方 ―理解し、育み、守るために―
田中敏隆・松原達哉・金澤一郎 共編 培風館より出典